

## 異文化交流実践を授業へフィードバック

浮葉正親・田中京子

### I. 基礎セミナー A (前期)

#### ■「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」(浮葉正親)

#### 1. 授業のねらい

日本人にとって、韓国は「似ている」ようでどこかが「違う」、ちょっと気になる国である。この授業では、日本人が韓国の社会や文化のどこに違和感を抱くのかを吟味し、韓国という〈鏡〉に映った日本人の自画像を議論していく。また、日本と韓国(朝鮮半島)との歴史的な深い関係についても理解を深め、日本を東アジア漢文化圏のなかに位置付ける、広い視野を獲得するのがこの授業のねらいである。

#### 2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系6学部の1年生12名であり、そのうち1名が韓国人留学生であった。TAには、国際言語文化研究科D1の金愨智さんをお願いした。また、講師として金栄大さんを迎え、朝鮮学校の教育について講演してもらった。

#### 3. 授業内容・スケジュール

##### 3-1 スケジュール

- 4/14 オリエンテーション
- 4/21 日本人と韓国人、どこが違うの?
- 5/12 日本人の韓国体験記を読む
- 5/19 激しい受験競争と母の祈り
- 5/26 現代に生きる儒教精神 - 韓国に嫁いだ日本人花嫁の葛藤
- 6/9 「朝鮮学校って、どんなところ?」(講師: 金栄大氏)

6/16 在日コリアンと日本社会 - 映画「パッチギ」とその背景

6/23 発表準備

6/30 発表準備

7/7 発表準備

7/15 韓国に関して調べたことを発表する (1)

7/21 韓国に関して調べたことを発表する (2)  
まとめ

##### 3-2 グループ発表のテーマ

グループ1: 韓国の受験戦争

グループ2: 韓国の食文化

グループ3: 日韓比較~雑学~

グループ4: 朝鮮学校~高校無償化~

グループ5: 現在に続く韓国の文化

#### 4. 評価

受講生の多くは、韓流の影響で特定の俳優や歌手、ドラマに対する知識はあるものの、隣国の人々の日常生活についてはほとんど何も知らない。そんな学生たちの関心を引きつけるために、前半はさまざまなビデオを見せながら授業を進めた。昨年度の終了時のアンケートに「みんなと話す時間をもっとあればよかった」と言う意見があり、今年度は少人数で話し合う時間をもうけた。

また、この授業のもう一つのねらいは在日コリアンに対して関心を持ってもらうことである。そのため、今年度は愛知朝鮮中高級学校の卒業生である金栄大さんを講師に迎え、朝鮮高校のカリキュラムや教材について紹介してもらった。また、春日井市にある東春朝鮮初級学校に5名の学生が訪問し、校舎を見学し、教員や同校の卒業生、他大学の学生たちとの交流会に参加した。グループ発表でもこのテーマが選ばれたので、こちらのねらいが伝わったものと理解している。

反省点としては、「韓国人ともっと話をしたかった」という意見が終了時のアンケートに書かれていた。来年度は、韓国人留学生のボランティアを募るなど工夫をしていきたい。

## ■ 「英語で学ぶ日本の文化」 (田中京子)

### Learn Japanese Culture in English

#### 1. 授業のねらい

日本文化について学び、伝統文化に実際に触れることによって、自分なりの見解を持ちそれを英語を使用して説明できるようにする。

日本文化といってもその捉え方は様々であるが、この授業では特に、日本の伝統文化として語られることが多い華道、書道、舞踊、折り紙などをとりあげる。その姿や心を学び、専門家の協力を得ながら実際に体験し、理解する。英語を使用しながら、日本文化について自分なりに説明できるようになることをめざす。

#### 2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系6学部の1年生12名(留学生5名、日本人学生7名)であった。TAは国際言語文化研究科博士前期課程1年の張静さんに、また留学生センターアドバイザー・カウンセリング部門相談員の柴垣さんにも毎回参加してもらい、合計15名で進めた。1名が1回病欠しただけで、出席率は高かった。

#### 3. 授業内容・スケジュール

- ① 4月14日 オリエンテーション  
Orientation/Introduction
- ② 4月21日 文化とは? 日本文化とは?  
What is the Japanese culture?
- ③ 4月28日 「着物」実習  
Practice of Kimono (日本文化公開ワークショップ) at CALE Forum
- ④ 5月12日 「着物」話し合い  
Discussion about Kimono
- ⑤ 5月19日 「舞踊」実習  
Practice of Nichibu (日本文化公開ワークショップ) at CALE Forum

- ⑥ 5月26日 「舞踊」話し合い  
Discussion about Nichibu
- ⑦ 6月9日 「華道」実習(クラス内)  
Practice of Kado
- ⑧ 6月16日 「折り紙」実習  
Practice of Origami (日本文化公開ワークショップ) at CALE Forum
- ⑨ 6月18日 「華道」「折り紙」話し合い  
Discussion about Kado and Origami
- ⑩ 6月23日 同上 Same as above
- ⑪ 6月30日 グループ分け、発表準備  
Grouping/Preparation for Group Presentation
- ⑫ 7月7日 発表準備  
Preparation for Group Presentation
- ⑬ 7月14日 公開発表 Presentation
- ⑭ 7月21日 (震災の影響で全学節電のためキャンセル)
- ⑮ 7月28日 (震災の影響で全学節電のためキャンセル)

#### 4. 評価

##### 4-1 授業と公開実習の連携

1990年代より行ってきた留学生センターのワークショップの内容を授業化することはかねてからの課題であり、昨年度より、日本文化に関するワークショップの授業化が実現した。ボランティアとして協力してきた専門講師たちにも継続して担当していただき、一部、教養教育院および留学生支援事業経費から講師謝金を支出した。日本人も含めた学部生たちが、留学生たちと共に実習を経験するという、理想的な環境を持つことができた。

##### 4-2 英語による授業環境

最初に“World Englishes”の考え方を紹介し、学生たちには、持てる言語運用力を駆使して、場の状況に合わせてコミュニケーションすることを促した。授業中は、一人の教師対学生という関係でなく、スタッフ3名も多様な英語で多様な考え方を分かち合うようにし、学生たちが間違いを恐れず発言できる環境作りを工夫した。学生たちの英語習得レベルは、ほとんどが入学試験対策レベルであったが、それをコミュニケーションの中で活用する場を提供できたと考えている。

また、隔週で英語のレポートを提出する必要があったため、よい訓練になったと思う。

#### 4-3 公開発表

最後の発表は、震災の影響で節電の必要があり全学で授業期間を短縮したため、2回の予定を変更して1回で行なった。学生12名が4つのグループに分かれ、日本の文化について調べ、考察したことを短く英語で紹介した。公開発表会とし、数名の学外参加者を得て、質問や話し合いも行った。発表テーマ：Japanese Traditional Games for Children/Japanese Food Compared to Chinese Food/Japanese Music Compared to Western Music/Japanization of the Language 日本文化について考察してきたことを深め、グループでまとめて英語で発信するという経験となった。

#### 4-4 日本文化の考察

実習後の話し合いの中では、それぞれの芸能や芸術について各自が調べたことを話し合い、マップを作製するという作業を通して、文化への考察を掘り下げるようにしてきた。伝統文化を毎日の生活とも結び付けて考えることで、当たり前だと思っていた自分の文化や異文化について新たな視点を持つきっかけとなった。

## II. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（代表：浮葉正親）

### 1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

### 2. 受講者及び講師

学部生は17名。学部別内訳は、文学部1、教育学部1、法学部6、経済学部2、情報文化学部2、工学部2、農学部2、医学部保健学科1であった。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生5名（韓国1、中国1、ベトナム1、スウェーデン1、ブルガリア1）、

日韓共同理工系留学生7名、計29名が受講した。

平成23（2011）年度は、浮葉正親（代表）、田中京子、松浦まち子、坂野尚美、田所真生子の5名がこの科目を担当した。また、岩城奈巳が1コマを担当した。授業内容と担当は以下のとおりである。

## 3. 授業内容

### 3-1 スケジュール及び担当者

10/3 オリエンテーション (1) (全員)

10/17 オリエンテーション (2) (全員)

10/24 留学生と日本社会 (松浦)

10/31 異文化との出逢い (田中)

11/7 グループ活動について (浮葉)

11/14 グループ発表準備 (全員) \*

11/21 グループ発表準備 (全員)

11/28 グループ発表と討論 (全員)

12/5 グループ発表と討論 (全員)

12/12 グループ発表と討論 (全員)

12/19 グループ活動から学ぶ(坂野)、レポート提出について

1/16 留学経験から日本を考える (岩城)

1/23 まとめ

\* 1コマ分(90分)グループによる自主学習を課した

### 3-2 グループ発表のテーマ

グループ1：空気

グループ2：お盆から見る日本人

グループ3：合図とジェスチャー

グループ4：人が心を開くまで

グループ5：Bento 日本の文化

グループ6：日本の学校生活

## 4. 評価

昨年に引き続き、グループ活動に対する評価を重視し、全体の40%（発表30%+自己評価10%）とした。その他は、レポート30%、出席15%、クラス討論への参加度15%（10%は自己評価とした）である。グループ発表に対する評価は、五つの評価項目を作り、4名の教員による評価を15%、他の学生による評価を15%とした。結果的には、どのグループも積極的に発表に取り組み、24~25%を獲得した。発表のなかにはイン

タビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く、全体に工夫が感じられた。レポートについては、レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は、最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

★ 自分にとって大きく変わった点として、意見を言ったり、積極的な姿勢で授業に臨むことができるようになったということがあります。これは完全に、この教室の皆さんから受けた影響によるものだと思います。いろんな人がいて、文化や考え方があって…ということを経験しただけでなく個人個人の違いも面白いな、参考になるなという見方で捉えられるようになりました。

★ グループワークでは、みんなで作ることの難しさを実感しました。大変だと思ったことはたくさんあったけれど、この授業をとってよかったです。小心者なので、なかなか人に話しかけたり、行動を起こせないで、背中を押してもらって行動できた先に、素敵な世界が広がっていることが分かったし、もっともっと私の知らない世界があるのだろうと思いました。

★ この授業を受けて日本という文化が私の頭の中できちんと整理できた感じです。以前の知識はすごく間違っていることも多かったのです。しかし、この授業を通して日本に対して、そして他の留学生の国に対して少しは分かった気がします。日本人は小心であまり話さない人が多いと思いますが、そうでもなかったのが驚きました。素直に言うと韓国人と同じだと思いましたが、韓国人より積極的に驚きました。(留学生)

### Ⅲ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論 a/b」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディア プロフェッショナルコース(担当教員:田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科日本語文化専攻で開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を、現在は同研究科の国際多元文化専攻メディアプロフェッショナルコースで「異文化コミュニケーション論」として継続開講し、昨年度からは前期と後期と分けての開講になった。異文化コミュニケーションの理

論と実践を核として少人数セミナー形式の授業を進めた。

#### 1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、特に非本質主義の見地から、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として主に英語を使用し、話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

#### 2. 参加者

国際言語文化研究科の大学院生が中心となって、他研究科の学生たちも入り、約10名で進めた。出身はイギリス、スリランカ、台湾、中国、日本、ブラジルで、英語と日本語の運用能力も様々だった。後期には高等教育研究センターの客員教授 Tricia Coverdale-Jones 先生の協力も得て、1セッション担当していただいたり、討論に参加していただいたりした。

TAは文学研究科 Dilrukshi Rathnayake さんが担当した。大学で日本語を専攻し、母国スリランカの大学で既に研究・教育歴のある大学院生だったため、授業内容の構成や進め方について意見交換しながら共にコースを運営していった。教員にとっても、よい学習の機会となった。TAは学生が英語で提出するレポートの添削補助を行ない、毎回の授業の反省と次の授業の準備も教員と共に行なった。

#### 3. 授業内容

##### 【前期】

- (1) 異文化間コミュニケーションに関する擬似体験学習と振り返り
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 異文化コミュニケーション理論(文献購読:宿題)
- (4) 文献についてのレポート(宿題、英語で執筆)
- (5) 文献についての討論(非本質主義の見地から)
- (6) 期末レポート(事例解釈)

【後期】

- (1) 異文化コミュニケーション理論の続き
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 事例検討論文

今年度の参加者は積極的に討論に参加しようとする学生たちが多く、活気のある授業となった。一部、出席率の低い学生がおり、最終的に単位をとることができなかつた。非本質的な文化の見方という新しい視点を取り入れ、資料には難解な内容もあったが、少数派としての立場も実体験していることが多い留学生たちにとっては、自分の体験を理論を通して見直す機会にもなった。期末レポートは、他の留学生たちにも役に立つ内容なので、論文集を作成できるよう助成金等申請を行っているところである。

4. 評価・課題

教員は国際交流関連業務や留学生相談の中で培われる異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく、この授業にとり組んでいる。また反対方向に、この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、それぞれの内容をさらに深めることが必要である。

今年度の授業では非本質主義的に文化を捉えるという視点を入れ、担当教員にとっても教育交流について見識を深めるための新たな試みの一年となった。高等教育研究センターの客員教授との意見交換や交流も非常に有意義で、異なる視点を提供してくれるものだった。

今後も時代によって変化する知見を取り入れながら、国内外の教員・専門家たちと情報・意見交換をし、教育と研究の双方向の活性化をはかりたい。